

母校のOBサッカー選手に  
突然抱かれてとろとろに溺愛  
されてしまった教師のお話

大和ソウ

## 【登場人物】

- ・小柳冬花(こやなぎふゆか)

28歳

母校の高校でサッカー部の顧問をする国語教師。

- ・来栖聡(くるすさとる)

28歳

プロのサッカー選手・冬花とは高校の同級生。

高校の時は目立たない生徒で、冬花に片想いをしていた。

俺様な性格だが、基本冬花には優しい。片想いを拗らせている。

五年前、私は高校の国語教師になった。自分が高校時代世話になった懐かしの母校だ。

母校は運動部が有名くらいで、他は特別目立つたところがないごくごく平凡な普通の高校。けれど先生もいい人が多いし、生徒たちも素直で元気だ。だから忙しい日々の中でも毎日楽しく仕事している。

ただ、少しばかり困っていることもある。

私の朝は普通の人より少しだけ早い。顧問をしているサッカー部の練習があるから、朝はいつも六時台に家を出ていた。家から電車で揺られること三十分。グラウンドには既に生徒達が来て練習を始めている。

「みんなおはよう！」

「小柳先生、おはようございます！ 練習先に始めてます！」

サッカー部の顧問になったのは、前任の教諭が病気を理由に退職したためだった。

サッカーは大学の時にマネージャーをしていたので元々興味があつたし、うちのサッカー部はいわゆる強豪校。全国大会で優勝経験のある強いチームだったから、頼まれた時は嬉しさもあつて二つ返事で引き受けた。

ただ、ただのマネージャー経験者が再び彼らを優勝に導けるのか——それだけが心配だ。

みんなやる気がある。毎日のように朝早く練習している。だからできる限りのことをしてあげたいのだけど……。

朝の練習を終えて、ジャージ姿からスカートに履き替える。私は教務室へ向かった。

今日も何事もなく一日が始まり、一日が終わる。いつもと同じ、平凡な毎日を送るはずだった。

受け持った授業を終えると、速攻でジャージに着替えて部活へ向かう。

思った通り、私が来た時には既に生徒達がグラウンドに集まって練習していた。

「え？」

生徒達が集まる中心にいる人物を見て、私は固まった。

派手な金髪に真っ黒なジャージ。大きなボストンバックを持った男性が、ユニフォームを着た生徒達に囲まれている。

——誰？

まじまじ見ていると、生徒達が私に気づいて声をかけてきた。

「先生、こんにちは！」

「あ、ええ……こんにちは。えつと……その人は？」

「先生！ この人來栖くるすさとるだよ！」

「くるすさとる？」

私が聞き返すと、その人物は呆れたように生徒を叱った。

「こら。初対面の人間を呼び捨てにするなって教わらなかったのか」

「だって、有名人じゃないですか！」

生徒は男性を知っているようだ。なんだか親しげに見える。だが、ここは学校。

無断で部外者を入れるわけにはいかない。

「ま、待って。その人はだれ？　ちゃんと先生に説明して」

「来栖さんはうちの卒業生ですよ！　プロのサッカー選手ですよ！」

「えっ」

私は驚いてその人を二度見した。

うちの卒業生がプロになっている話は前任の教諭から聞いている。だけど、それが誰で、どういう人間かまでは知らない。

生徒達は全員知っているのか彼と和気藹々と話していて、私は少し疎外感を感じた。

恐らく、いやかなり……彼は有名な人物に違いない。元サッカー部マネージャーだなんて経験者気取りになっていた自分が恥ずかしくなった。

「ねえ、先生。来栖さんに練習見て貰っていいですか？」

「あの、そもそも来栖さんはどうしてここに？」

「OBが懐かしくなって母校に来ちゃ悪いかよ」

「そ、それもそうですね……。分かりました。来栖さんが良ければ、是非生徒達を見てあげてください」

やったあ！ と声をあげて生徒達が喜ぶ。

彼は引つ張られるようにグラウンドに行つてしまい、私はなんだか置いてけぼりになった気分だった。

まあ所詮私なんてお飾りの顧問だったから、本格的に指導してくれる人が現れて生徒達も嬉しいのだろう。

練習中、しばらく彼を観察した。派手な見た目をしているけど、彼はプロの選手というだけあって動きが明らかに洗練されている。当然のことながら足も速いし、



動きは俊敏。コントロールも正確。まったく粗がない。溜息をつくほど立派なサッカー選手だった。

練習が終わると、来栖さんはベンチに帰って来た。私はとりあえず、お礼も込めてタオルとドリンクを差し出した。

「今日ありがとうございます。わざわざ練習に付き合ってください……みんな喜んでいてみたいです」

「別に。丁度暇してただけだ」

その派手な金髪が濡れて、何故が先程の彼とは違った印象を受ける。

サッカー選手だから、というのは変だけど、顔立ちは端正だ。初めて見た時は金髪に衝撃を受けたけど、モテそうな顔をしている。いや、実際モテそうだ。この顔でプロのサッカー選手。絶対モテる。思わず見惚れてしまいそうだ。

——ダメダメ。なに考えてるの。私は教師なんだから。

そうだ、と思い付き、私はある提案を試してみた。

「あの……差し出がましいお願いだとは思いますが、もし良ければまた生徒達を指導して頂けませんか？ 私だと指導出来るだけの経験がないので……」

来栖さんはじろりと視線を向け、少しばかり考えるような素振りを見せた。

まあ、普通にプロの選手として活動している人がたかが高校生の指導なんて引き受けてくれないだろう。きつと忙しくしているだろうし、そんな暇あるわけない。

どうしてこんなことを言ってしまったのか……。生徒達のためであるのはもちろんそうだけど、なんとなく、彼と接点が欲しかった。

危険だと信号が鳴るのに、火傷すると分かっているのに、蛍光灯に吸い寄せられる羽虫のようにそれを口にしてしまったことを後悔した。

「報酬は」

「え、報酬？ あ……ええと、すみません、そんなことまで考えていなくて……。校長と相談して臨時顧問にして頂けるように——」

「冗談に決まってるんだろ。別に報酬なんかいらねえよ」

「じゃあ、引き受けて下さるんですか？」

「お前がその色気のねえジャージを脱いだらな」

「なっ……。か、からかわないで下さい！」

来栖さんはケラケラ笑っている。からかわれたのだろうか。一瞬まともに考えてしまった自分を叱責した。何を期待しているんだろう。バカみたいなことを考えてはいけない。

来栖さんはきつと遊び人だ。だからそんな軽い発言ができる。真に受けちゃいけない。

けれどその言葉は二重の意味に取れて、私の胸はばくばくと音を立てていた。

\* \* \*

朝の通勤電車で揺られながらスマホを眺める。画面に映った情報を見て、私はかなり驚いた。

——こんなに有名な人だったなんて……。

画面に書かれた『来栖聡』の経歴を見て、自分の無知さを呪った。

現役のサッカー選手だと聞いていたが、彼はどうやらかなり有名な選手らしい。サッカー部顧問のくせにこんなことも知らなかったなんて、情けない。

身長は百八十五センチ。かなりの高身長な上、端正な顔立ちが際立って女性のファンが非常に多いようだ。

——あれ？ 私と同じ年……？

年齢、二十八歳。まさかの同年代だった。

だが、来栖聡なんて名前の人物に覚えはない。これだけのイケメンだったら、きつと在学中もモテモテだったはずだ。なぜ覚えていないのだろうか？

ネットで検索すると彼の画像がたくさん出てくる。フィールドで走る画像。ガッツポーズをとる画像。ほぼフィールドの写真ばかりだが、どれも男前だ。

練習中の彼を思い出して、また胸の奥がキュンと疼く。

—— 本当に私どうしちゃったんだろう。来栖さんのことばかり考えて。

この間からずっとだ。彼が帰るのを名残惜しく感じたり、こうやって思い出して見たり……。まさか、好きになつてしまったのだろうか。

身のほど知らずにも程がある。彼はサッカー選手。しかも超有名な。たかが高校教師の私と釣り合うわけがない。

きつと毎日刺激のない平凡な生活を送っていたから、彼のような人が珍しいだけだ。無理やり自分を納得させ、目的地に着いた電車を降りた。

いつも通りの時間を終えて、何事もなく放課後がやってきた。

私はいつも通りジャージに着替えてグラウンドへ向かった。

今日は全体練習とウエイトトレーニング、と。練習メニューを頭で考えながらグラウンドへの階段を降りると、そこに見慣れない人物がいる。いや、見慣れないが、ここ最近スマホで毎日見ていた人物だ。

「よお、来んのが遅えじゃねーか」

「く、来栖さん」

黒いジャージに身を包んだ人は、まるでずっとそこにいたみたいに馴染んでいた。当然だ、彼は卒業生なのだから。

驚く私を置いて、後ろからわらわらと現れた生徒たちが驚いて彼に声を掛ける。

「あ！ 来栖さん！」

「よう。指導しに来てやったぞ」

「指導……」

ハッとした。そういえば、自分がこの人に指導を頼んだのだ。

だが、いきなりすぎて声も出ない。その辺りのこと全く話し合わないまま先日別れてしまったので、もう会えないものだと思っていた。

「問題ねえだろ、小柳先生」

「え？ どうして私の名前……」

「調べたら分かる。今日は全体練習とウェイトトレーニングだったな」

「え？ あ……はい、そうです」



どうしてそんなことまで知っているのか。いや、卒業生なら元の顧問が作ったメニューを把握していても不思議じゃない。

彼はテキパキと生徒たちに指示を出した。まるで、彼が本当の顧問みたいに。

何はともかく、この人が練習を見てくれるなら少し安心だ。

しばらくの間、私はぼんやりと彼の姿を見つめた。黒いジャージは彼が所属するチームのカラーだ。そういえば出会った時の服装も同じだった。練習帰りに寄ってくれたのだろうか。

「先生！ ボール！」

「え」

ガッン！ と頭に衝撃が響く。額にぶつかった衝撃はわんわんと頭に余韻を残し、少しして酷い痛みへと変わった。

バウンドしたボールがすぐそばに落ちる。それが、私の頭にぶつかったのだと気がついた。

「小柳先生！ 大丈夫ですか!？」

「うわあ、痛そう……」

手を当てる地面に座り込んだ私を生徒たちが囲む。情けない。痛恨のミスだ。

「何やってんだ」

心配する声を割って入って来た来栖さんは、頭を押さえて蹲った私の前に立った。

「おい、なんか冷やすもん持って来てやれ」

「は、はいっ!」

「まったく、顧問がぼうつとしてんじゃねえよ。どうなんだ、痛いのか」

痛いから蹲っているのだ。こんな時まで上から目線の彼は、生徒が持つて来たアイシング用の保冷剤を丁寧にタオルに包むと私の額に当てた。

「これで冷やしとけ。しばらく動くなよ」

「ありがとうございます……」

痛みは次第にひいてきた。保冷剤のおかげだろうか、まだ少しズキズキするが、耐えられないほどではない。

——本当に、私は何をやってるんだろう。

ぼうつとして、考えていたことは来栖さんのことなんて。バカにもほどがある。彼だつて呆れていた。

けど、意外と優しいところもあるのだ。つつけんどんな人物かと思っていたけれど、意外と面倒見がいいところもあるらしい。いや、サッカー選手だから怪我の怖さを知っていて、だから世話を焼いただけなのかも。

日も暮れて生徒たちが片付けを始めた。

結局放課後丸々生徒たちを任せてしまった。彼も暇ではないだろうに……。助かったが、なんだか申し訳ない。

「今日はありがとうございました。本当に、色々面倒をおかけしてしまって……」

「練習は集中しろ」

「……はい。おっしゃる通りで……」

「このあと時間あるか」

「え？ はい。家に帰るだけです」

「待っててやるから駅の北改札にいろ。話がある」

「話……」

「部活の。俺に指導して欲しいんじゃないのか」

「……あ、はい。そうでしたね」

何を、勘違いしているんだろう。一瞬デートに誘われたのだと思ってしまった。

さつきボールにぶつかった時に脳みその中身が色々とやられてしまったらしい。い

や、元々か。

私はジャージから仕事着に着替え、言われた通り駅の北改札口に向かった。改札前にやたら目立つ背の高い男が一人立っている。来栖さんだ。

来栖さんもジャージから私服に着替えていた。ジーパンにジャケット。少し綺麗めだが、カジュアルな格好だ。すらりとした肢体はスタイルが良くて思わず見惚れてしまう。多分、私の周りにいる女の子もそう思っているはずだ。

なんだか芸能人オーラみたいなのが漂っていて声をかけるのをためらった。

けど、来栖さんはすでに私に気がついた様子だったので、いつまでもだもだしているわけにもいかない。

「来栖さん、お待ちせしました」

「ああ」

「あの、それでどこで話しますか？」

「晩飯でも食いながら話すか」

彼が歩き始めたので、私も黙ってそれに付いて行った。

駅前は毎日通る場所だが、ここで何かしたことはあまりない。学校が終われば直行直帰だから、どこかに寄って買い物したり食事に行くこともなかった。

来栖さんは雰囲気の良い居酒屋を選んだ。そこそこ賑やかだが、そこまでうるさくはない。仕事帰りの女性も入れそうな小洒落た店だった。

来栖さんは生ビール。私はお酒に弱いため、カクテルを頼んだ。酒は正直苦手だ。社会人になってしばらく経った今でも甘いもの限定で、カクテルか梅酒しか飲めない。

「今日はジャージじゃねえのか？」

「帰りはちゃんとスカート履いています！」

「まあジャージでも悪くないけどな。お前はそっちの方がいい」

「もう……あなたは人をからかってばかりですね」

頼んだドリンクが来て、グラスを合わせる。出会ってまだ二回目なのにこんな人と食事しているなんて不思議なものだ。

来栖さんは仕切り屋なのか、適当に料理を頼んでいった。グラウンドで見る彼とは、また違った顔だ。

「エロい口」

「は？」

唐揚げにかぶりついていた私は思わず耳を疑った。来栖は頬杖をついて、じつと私のほうを見ている。真面目な顔だ。いつもみたいに冗談を言っているようには見えない。

「女は飯食ってる時が一番エロいらしいな」

「何をいきなり……またからかかってるんですか？ それとも酔ってるんですか？」



「そうかもな」

からりと氷を鳴らし、グラスを置く。ニヤリと笑った来栖さんの顔は少し赤く  
なっている。

やはり、彼は危険だ。また心臓がばくばくと音を立てる。こんな言葉を間に受け  
ていたら身が保たない。私は対抗するように来栖さんを睨みつけた。

「そ、それより、部活の話ですよ。指導しに来て頂けるといふことですけど、  
具体的にはどうお考えですか」

「お前が良いなら毎週水曜日の放課後に来てやる。それと土日の練習は試合が被っ  
てることが多いから無理だが……次の日は休みになることが多いから、その日な  
ら一日来てやれないこともない」

「毎週……そんなに来てもらってもいいんですか？ お仕事忙しいんじゃない？」

「だから、基本は空いてる時間帯にしか来ねえよ。無理矢理調整してるわけじゃねえ」

「そうですか……」

「今大会の最中だろ。選手権行くななら今から秋の準備しとかねえと間に合わねえぞ。スケジュールは決めてんのか？」

「いえ……前任の先生がやっていた時のままなので、特に変えてはいません」

「見直せ。選手権行きたいならまともに練習してたんじゃないや無理だ」

「分かりました。その相談も、乗っていただけですか？」

「報酬」

「……それはいらんじゃなかったんですか？」

「それはこの間の話だ。長い練習に付き合うんだ。少しは貰ったっていいだろ」

「……いくらですか？ 交渉次第では学校から出してもらえなくもないですけど……」

来栖さんは何も言わずに私の顔を指差した。

狙いを定めた肉食獣のような目が、グラスを口に運ぼうとする手を止めさせた。

ごくり、と喉が鳴る。息をするのさえ、億劫になってしまいそうだ。

「お前だ」

どれほどその言葉の余韻を楽しんだのだろうか。顔が真っ赤になっていくのがわかる。酒のせいではない。

「なっ……」

「クク、よつぽとお前は欲求不満らしいな」

「……つまたからかったんですか！」

「からかってねえよ。お前が勝手に勘違いしたんだろ」

「……早合点してすみませんでした」

本当に、私はなんなのだろう。この女はバカだと思われるんじゃないだろうか。

仮にも国語教師なのに言葉の意味を履き違えるなんて、バカの極みだ。しかも欲求不満だなんて思われて、恥ずかしいことこの上なかった。

恥ずかしさを誤魔化すためか、話が続かないからか、いつもよりハイペースで飲んでしまった。カクテル四杯は普段酒を全く飲まない私にとってはかなりの量だった。

食事が終わり店の外に出る。あたりは暗いが、繁華街は灯りがあるから華やかだ。私はふらりとよろけながらもなんとか足で踏ん張った。

「頭は大丈夫かよ」

「その言い方だと……まるで私が頭がおかしい人みたいに聞こえます。ボールをぶつけた箇所は大丈夫か？ って……言ってくださいね……」

「意味が分かってんだから同じだろ」

「もう……頭は、もう痛くありません。少し腫れてますけど……時間が経てば治ると思います」

「ふーん……」

呂律が回らない口で答えると、来栖さんの顔を近付いた。整った顔がいきなり近付いたのに、ぼんやりした頭は彼の端正な顔を見てもまだ反応しない。ただ、キスされるかもしれないと思った。

「どうやら、私は彼の言う通り欲求不満になってしまったのかもしれない。」

「……今、何考えた」

「っ何も……」

「そういう顔してると、本当にキスされるぞ」

「んっ……」

唇が近付いて、口が塞がれる。なのに私は動けない。

頭がふわふわする。だから、彼が何をしているのか分かっているのに、深く考えることができなかつた。